

# W. H. Hudson の小説におけるもう一つの女性像

Another Image of Women in W. H. Hudson's Novels

佐藤 幸正

Yukimasa Satoh

## 序

Hudson の小説を初期のものから後期のものまで通読してみると、そこにはいろいろなタイプの女性が登場し、作者の女性観を窺い知る上で興味深いものがある。それら多くの女性のなかでも、作者が一貫して追求し続けてきた典型的な女性像となると、それは自ずと限定され、二つのタイプに大別されると考えて良いであろう。その一つは作者の理想的な女性像、即ち Rima に代表される Rima 像である。彼女の成立経路を考察してみると、作者は処女作のなかに既に彼女の萌芽を発生せしめ、第二作の Yoletta という女主人公においてその萌芽を大いに成長させ、*Green Mansions* に至って遂に Rima 像を完成している。彼女の特徴とするところは、人間と自然は同胞であり、一体であるとする作者の思想を反映し、自然人として創造されているところにある。彼女の性格及び行状が現実界の人間から遠くかけ離れた印象を与え、超自然的な印象を与えるのもこのためである。

もう一つの女性像は Elfrida という女主人公において完成している。彼女の場合、Rima とはむしろ正反対の性格を持ち、到底作者の理想像とは言えない。ただし、その成立過程を推察してみると、Rima のそれに酷似しているのに気付く。即ち、処女作にその萌芽が見られ、第三作において大きな発展を遂げ、晩年の作 *Dead Man's Plack* において Elfrida 像が完成するからである。彼女がどういった点で Rima と異なるのか、どのような経路を経て Elfrida 像が形成されたのか、主として三つの作品を通じて述べることにする。

### 1. 処女作にみる Elfrida 像の萌芽

処女作 *The Purple Land* (1851) に登場する女性たちのなかで、Elfrida 像形成の萌芽と目されるのは Do-

lores であろう。彼女についての記述は本文中三章にすぎないが、その特徴は十分把握できる。彼女はウルグワイの辺鄙な片田舎に住んでいるが、その家は古い大きな石造で、そのあたりでは最高級のものである。母と共に彼女はこの屋敷の lady として客人を持って成し、かれらの提供する世間話を通じて国情にも聡く、あるいは恋もするという、極めて現実的な女性として描かれている。彼女の当面の関心事は時の政権を打倒し、再び過去の平和を取り戻すことにある。彼女は現政権を悪辣で、ブラジル軍の援護のもとに樹立されたものであり、それが原因で国民の不幸が始まったと考える。戦争で父を失った彼女は、父の親友 Santa Coloma 将軍が謀叛を起こし、政権奪回を計っていることを熱烈に歓迎する愛国者である。彼女は主人公の Lamb を口説き、嫌がる彼を遂に将軍の配下にさせることに成功する。将軍に期待を寄せるその熱意、Lamb を口説くその情熱の烈しさは彼女を積極的に一途な性質の女性、即ち Elfrida を思わせるのである。もう一方の代表的な女性である Rima は人間社会と没交渉の自然環境に置かれているために、ともすると実在性や人間味に欠けるきらいがある。Dolores はそれとは対照的に、あくまでも現実界に生存し、人間の感情を持った女性として描かれている。日常、彼女は一家の lady として母を助け、召使に仕事を命じ、来客を持って成すなど、その役割を十分に果している。黒人の召使に対する心遣い、来客を応待する時の物腰など、日常生活における彼女にはどことなく気品と威厳が感じられる。しかし、主人公との愛の破局時に見られる情熱の激しさは彼女の秘めた性格の一面を覗かせている。主人公は将軍の部下になったことを口実に、彼女に言い寄る。彼女はこれに応じて自らも愛の告白をし、彼を受け入れる。しかし、彼に妻帯の身であることを告白された瞬間、彼女の言動は凄まじいものへと急変し、彼をたじろがせてしまう。

“You have a wife—a wife whose existence you concealed from me till this moment!” she said. “Now you ask for mercy when your secret has been wrung from you! Married, and you have dared to take me in your arms, to excuse yourself afterwards with the plea of passion! Passion—do you know what it means, traitor? Ah, no; a breast like yours cannot know any great or generous emotion. Would you have dared show your face to me again had you been capable of shame even? And you judged my heart as shallow as your own, and after treating me in that way thought to win my forgiveness and admiration even by parading before me with a sword! Leave me, I can feel nothing but contempt for you. Go; you are a disgrace to the cause you have espoused!”<sup>1</sup>

彼女の平素の穏やかな態度とは似ても似つかぬこの激情の逆りは、*Fan* における Starbrow にしばしば露顯されることになり、*Dead Man's Plack* の Elfrida にも受け継がれてゆく。ただし、この激情は前二者の場合、最終的には和解することで解決するが、Elfrida の場合はその余地がないところに相違があるのであり、悲劇が生じるのである。

Dolores のこのような激しい気性と違い、あるいは Lamb 青年を革命軍に参加させようとする熱情あふる雄弁さ、あるいは革命の失敗を懸念する母親を説得する氣丈夫さなどから判断して、彼女には Rima に見られない積極的で行動的な性格が窺われる。彼女の愛のあり方においても、人間的な愛を知らず、これを拒否しようとする Rima の態度と比較するならば、そこには大きな相違が見られるのである。Rima の内気で、人前を恥じる態度と比較してみても、彼女の場合はそれがなく、*lady* としての風格と気品を備え、快活に客人に接している。自然と共に生き、自然に同化した Rima は作者の理想を集結した想像上の自然人であった。このために性格描写がややもすると *reality* に欠け、言動において超自然さ、あるいは不可思議さが目立ってくる。一方、Dolores の場合、人間界に属した人物である関係上、その思考や言動において現実性が濃厚であるのは当然なことであろう。

作者が処女作において Dolores のような女性を登場させているのはむしろ例外的な現象である。Margarita や Transita はむしろ Rima の萌芽ともいべき人物であり、その他の女性も性格的には Rima に近い場合が

多いからである。このことはその他の小説についても言い得ることである。つまり、作者の理想的女性像というのは Rima に共通する何かを秘めているということになる。例えば、第二作に登場する Yoletta などはその性格や行動、あるいは思考などから推察して、Rima の出現を予想させるに十分な要素を持っているのである。このような作者の女性観からすれば、Dolores のような女性はやはり例外に属すると言えよう。しかし、第二作から3年後に発表した *Fan* (1892) という小説になると、今度は一転して Dolores のような女性、即ち現実立脚した実態性を備えた女性を描くことになる。時代の風潮に影響されたのであろうか、作者には明らかに *realism* を志向した形跡が見られるのである。しかし、彼がそれ以後も *realism* を追求していったかと言えばそうではない。彼の創作上の主眼点は人間と自然との関わり合いを基調とした *romanticism* の追求にあったからである。こういう点からしても *Fan* は特殊性を持っているのであり、作者の長い創作活動のなかでも注目すべき作品となっている。

## 2. *Fan* にみる Elfrida 像

1892年に公表された *Fan* は、小説のなかでは第三作目に相当し、一大長編をなしている。当初は三巻本としてロンドンの Chapman and Hall 社から出版されたのであるが、後年全集が出るに及んで一巻本となった。この作品の評価については、1892年7月16日号の *Athenaeum* が “*Fan* is as dull and badly put together as it is coarse and repulsive.”<sup>2</sup> と酷評しており、また研究者の大方の批評もあまり芳しいものとは言えない。後年、作者自身もこの作品が失敗作であることを認め、“About the old novel: the title was ‘*Fan*,’ but it is useless to bother about it as it is no good. Or at any rate it is a book spoiled by one bad thing in it—the character of the heroine a poor girl of the slums who develops into an impossibly refined creature.”<sup>3</sup> と、批評家であり、友人でもあった Edward Garnett に書き送っている。自作について作者は常に謙遜して意見を述べる人であるから、文字通り解釈して良いのかどうかかわからないが、それにしても当時の評価が良くなかったことは確かである。友人で批評家の Morley Roberts は作者の評判が悪化することを心配して、出版を差し控えるよう忠告しているが、作者は自分の評判を気にするよりも、鳥類保護協会の資金調達のために、敢えてこれを公表したのであった。<sup>4</sup>

この作品の持つ意義を考えてみるならば、まず第一に作者が realism に基づいた小説を実験したということになる。それまで作者が一貫して描き続けてきた、自然と人間との密接な関わり合いを離れ、今度は一転して大都会のスラム街に舞台を移し、下層社会に属する一少女 Fan の生きざまに焦点を当てたのである。作者の作風からして、ロンドンという大都会に舞台を移し、そこに取材したこと自体、例外的な構想だったと言える。娘の Fan に、飲んだくれの父親がマッチ売りを強要する場面、母親が近所の女と掴み合いの喧嘩をして死亡する事件、あるいは両腕を失い、義手で楽器を弾く哀れな路上の男など、作者は世間から見捨てられた下層社会の人々をありのままに描写する。Frederick が “The book shows strong influence from contemporary sentimental and romantic best sellers...” とか、あるいは “Fan herself, the central character of the book, is an extreme example of the mistreated heroine of sentimental fiction...” などと評し<sup>5</sup>、あたかもこの小説が sentimental で romantic な作品でもあるかのような印象を与えているが、果してそうであろうか。例えば主要人物の一人、Constance の場合について言えば、彼女は田舎の家を捨て、母親の反対を押し切ってロンドンへ出て行くのであるが、それは地方の因襲や道徳、特に信仰上の問題から解放されたいためであった。母親からの精神的独立を勝ち得、大都会で自由な生活をするためであった。そこには新しい女への目覚めが、あるいは女の自立が感じられ、自己を貫ぬく一女性の姿が描かれている。ロンドンで好きな男と結ばれるが、やがてその夢も破れ、具に辛酸をなめつくし、虚しい気持ちに襲われながら、必死で生きてゆく姿のなかに、凄まじいほどの女の生きざまを感じる。そこには Frederick が評するような、sentimental や romantic なものは微塵もなく、もっと切実で、もっと深刻な雰囲気漂っている。ただし、小説の書き出しに比較して、結末をあまりにも単純に happy ending にしてしまったきらいは否めない。このバランスの欠如から Frederick は上に述べたような印象を受けたものであろう。しかし、この小説が当時の best sellers の影響の下になったというよりも、Haymaker も言うように<sup>6</sup>、作者が Gissing 流の作品を書こうとして、不慣れた題材に手を染めた結果、徹底を欠いた写実に終わってしまったと考えた方が、妥当であろう。この新しい実験、世相をありのままに描こうとした試みは完全には成功しなかったが、作者の夢と現実の狭間を描く例の技法が、この時代の習作のためであることを思えば、意義あることであつたと言えよう。

この小説のもう一つの意義は Elfrida 像形成に一役買

っていることである。登場人物の一人である Miss Starbrow には多分に Elfrida 的性質が含まれているように思える。まず、主人公の Fan が受けた Starbrow の印象から述べてみよう。

By-and-by the front door opened and a lady came out and down the steps, and on reaching the pavement stood still and looked hard at Fan. She was tall, and had a round shapely figure, a well-developed bust, and looked about five-and-twenty years old. Fan thought her marvellously beautiful, but felt a little frightened in her presence, she was so tall and stately, and her face had such a frowning, haughty expression. Beautiful women-faces had always had a kind of fascination for her—the gentle, refined face, on which she would gaze with a secret intense pleasure, and a longing to hear some loving word addressed to herself from a sister with sweet lips, so strong that it was like a sharp pain at her heart. The proud masterful expression of this beautiful face affected her differently—she feared as well as admired.<sup>7</sup>

この場面は Fan が玄関掃除の仕事を求めながら、ロンドンの Dawson Place にやって来た時、庭付きの自宅から外出してきた Starbrow から受けた第一印象である。彼女もまた lady として描かれている点は前述の Dolores の場合と同様であり、注目すべきことである。というのは、作者が社会的身分の高い女性を描くことは稀であるばかりでなく、晩年の作 *Dead Man's Plack* (1920) に出てくる Elfrida に至っては地方の豪族の娘として描くことになるからである。このように、社会的身分関係からみて、Dolores, Starbrow, Elfrida の三人は比較的高い地位に属しており、一脈合い通じるところがある。容姿については、Fan の場合には “pale and thin girl”<sup>8</sup> とあり、Rima をはじめとして他の多くの女主人公によく見られる共通点であるのに反して、Starbrow の場合は背の高い豊富な女性として描かれている。年齢についても、多くの女主人公が15歳前後の少女であるのと異なり、彼女は25歳頃の成熟した女性であり、この点 Dolores にも共通することである。スラム街に生育し、みずばらしい身形をした Fan が流行服を纏ったこの lady を一見して気後れし、恐れを感じたことであろう。それは身分の低い者が高い者に対して抱

く一種の劣等感であろうが、相手に威厳を示し、相手を威圧する力は Elfrida に至って一層顕現されるのである。Dolores 同様、Starbrow の美貌は後年、やはり Elfrida において再現され、絶世の美人として描かれてゆく。

次に、Starbrow の内面について述べるならば、“She was touchy, passionate, variable in temper; and if her stormy periods were short-lived, she also had cold and sullen moods, which lasted long, and turned all her sweetness sour...”<sup>9</sup> という表現のなかに要約されているように思える。短気で気性が激しく、それに加えて移り気な彼女は、時として些細なことから気分を害し、突然感情を爆発させることがある。同性は大嫌いだと自ら述べながら、Fan と連れだって歩いているのを人に見られ、“You know you were always a great woman-hater—a kind of she-misogynist...”<sup>10</sup> と凶星をさされて、癡癡を起こす場面などは Elfrida の性格を思わせるに十分であろう。彼女はまた、他人に対する配慮の欠如、嫉妬心、利己的な面を持ちあわせた人物である。例えば、Fan が学校からの帰路、雨に合い、若い紳士に家まで送ってもらうのであるが、これが Starbrow の気に触り、部屋から Fan のベットを選び出させてしまう。あるいは、Fan が Constance に愛情を寄せるのを警戒して、自分と彼女を同一に愛してはならないと警告する。このように彼女はかなり利己的でしかも独占欲の強い人物であるが、彼女を欠点だらけの人物と考えては気の毒であろう。彼女は身寄りのない Fan を引き受けて以来、house maid や cook として使用することはせず、companion の対遇を与え、lady となるべく教育を施している。あるいは自分の誤解から Fan を叱責したことがわかれば、後で謝罪する素直で愛すべき女性であることも付言しなければならない。孤児として拾われ、教育された Fan が、あまりにも純真で素朴な性格故に、あるいは主人に忠実な優しい主人公である故に、対照的な Starbrow の性格が浮き彫りにされてくるのである。言ってみれば、Starbrow という女性は lady としての資質を備えてはいるが、多分に eccentric な面を持ち合わせた人物ということになる。これが極度に嵩じてくるのが Elfrida であり、彼女に至ると我意我欲のために、人を殺してまでも権力を志向することになるのである。

### 3. *Dead Man's Plack* にみる Elfrida

前述の二書即ち、*The Purple Land* 及び *Fan* における Elfrida 像成立に寄与した二人の登場人物は、いず

れも主人公の役目をしていないわけではない。ということは、それぞれがそれなりの役目を果してはいるが中心人物ではないということであり、あくまでも脇役的存在であるということになる。しかるに、晩年の作 *Dead Man's Plack* (1920) にみる Elfrida はこの書の女主人公であり、主役を演じている点、前二書とは異なる。言わば、処女作に詩かれた Elfrida の種子は Dolores において芽生え、Starbrow に至ると大役を与えられ、それに相応しい大きな発展を見せてはいるが、まだ完成された姿ではない。しかし、Elfrida に至ると、その萌芽は成熟し、結実の段階に到達し、完成された姿を見せてくれるのである。このような発達段階を経て成立した Elfrida とは一体どういう人物なのか、彼女の内外両面から見ることにする。

彼女の場合も西国一の美人と噂されるほど美しく、しかも Devon の統治者の一人娘であることからすれば、その美貌において、またその身分の高さにおいて、前二者と共通点を有することになる。ところで、この作品は10世紀後半 Edgar 王時代の伝説に取材した歴史小説となっており、宮廷を取り巻く事件や相克が次々に展開されている。再び彼女の美貌について付言するならば、西国に美人ありとの噂を聞いた Edgar 王は彼女を王妃として迎えるべく、早速使者を派遣し、その品定めをさせている。その使者の役割を仰せつかったのは側近で、無二の親友 Athelwold であったが、彼女のあまりの美しさに彼は役目も忘れてその虜になってしまう。

Now, the first sight of her, the first touch of her hand, wrought a change in him, and all thought of Edgar and of the purpose of his visit vanished out of his mind. Even he, one of the great nobles of his time, the accomplished courtier and life of the court, stood silent like a person spell-bound before this woman...”<sup>11</sup>

これは使者としての目的も忘れ、Elfrida に恋をしてしまう Athelwold の愛心ぶりを描写したものであるが、彼女の艶やかさ、男を魅惑する美貌のほどが想像されるであろう。Rima の場合も彼女同様美しい娘であるが、彼女のような艶やかさ、あるいは男を見る時の魅惑的な目差はなく、自然のなかで育まれた健康で野性的な美しさを秘める。この点、両者の美貌には相違がみられるのであるが、髪が長く、それが変化に富む色彩を有していることや、透視力を備えたそのすばらしい目など、Rima に共通する特徴もまた見られる。社会的な身分階級となると、Elfrida の場合、一國を統治する地方の豪族の娘

であり、後年 Edgar 王の王妃となるのに対し、Rima の場合は大森林に住む自然人であり、社会も階級も全く相異なる。従って、Rima と Elfrida はその美貌において、またその身分や環境において、大いに異質な面を有していることになる。

次に彼女の性格面について述べるならば、これまでの女主人公には見られない特徴を備えていることに気付く。彼女には Rima に見られるような純真で素朴な性格も、天使の如き神聖さもない。あるいは各主人公に共通し、作者が得意として描く、例の哀感を秘め、同情心を抱かせるような可憐さも全く見られない。そこに見られるのは、Dolores や Starbrow 以上に強力な個性をもち、気位の高い、また権力を志向する女性の姿である。物質文明を揶揄し、金には価値が無いことを唱え、あるいは機械化される文明を嫌って自然を愛した作者が、華やかな宮廷に舞台を移し、しかも “She loved gems above all beautiful things”<sup>12</sup> とあるように、宝石万能を信じる Elfrida を描いたことは、稀有な現象と言わざるを得ない。しかし、この現象は決して作者の理想や信念を吐露したのではなく、取材した伝説の持つ拘束性に左右された結果にすぎない。Starbrow の場合は自分の誤解から逆上し、相手を痛罵する場面がしばしば見られるが、自分の非を悟った時には謝罪する素直なところがある。しかし、Elfrida にはその素直さはなく、彼女に比べると無情であり、残忍である。Edgar 王に刺殺され、城に運ばれた夫の死体に涙する Elfrida は、部屋で一人になると、その態度を急変し、自由の身になれたことを喜び、王の愛を勝ち得たことを喜ぶのである。しかも、何れは王妃となることを期待して、夫が殺されるよう計略を仕組んだ女である。このことは彼女の次の告白が例証してくれるであろう。

O, glorious Edger, she said, the time will come when you will know what I feel now, when at your feet, embracing your knees and kissing the blessed hand that with one blow has given me life and liberty. One blow and your revenge was satisfied and you had won me; I know it, I saw it all in that flame of love and fury in your eyes at our first meeting, which you permitted me to see, which, if he had seen, he would have known that he was doomed. O perfect master of dissimulation, all the more do I love and worship you for dealing with him as he dealt with you and with me; caressing him with flattering words until the moment came to strike and slay. And I

love you all the more for making your horse trample on him as he lay bleeding his life out on the ground. And now you have opened the way with your knife you shall come back or call me to you when it pleases you, and for the rest of your life it will be a satisfaction to you to know that you have taken a modest woman as well as the fairest in the land for wife and queen, and your pride in me will be my happiness and glory. For men's love is little to me since Athelwold taught me to think meanly of all men, except you that slew him. And you shall be free to follow your own mind and be ever strenuous and vigilant and run after kingly pleasures, pursuing deer and wolf and beautiful women all over the land. And I shall listen to the tales of your adventures and conquests with a smile like that of a mother who sees her child playing seriously with its dolls and toys, talking to and caressing them. And in return you shall give me my desire, which is power and splendour; for these I crave, to be first and greatest, to raise up and cast down, and in all our life I shall be your help and stay in ruling this realm, so that our names may be linked together and shine in the annals of England for all time.<sup>13</sup>

上記の引用文から、彼女が王の元で権力と栄光を我がものとし、永遠のものにしようとする野心が窺えるであろう。王妃となり、王との間に王子をもうけた彼女が次に考えたものは何であったか。彼女は先妻の子 Edward 王子が自分を慕ってくれ、また自分の子 Ethelred 王子を可愛がってくれる故に、好感を持っていた。否、好感を持つどころか、心から彼を愛していたのである。ところが、王の死後先妻の子 Edward 王子が次期王位継承者になることを内心恐れ、我が子を王位につけるために彼を刺殺させている。彼女のこうした一連の行為を考えてみると、徹底した私利私欲に貫かれていることがわかるのである。あれほど賞賛した Edgar 王の死に、悲しむことも、涙一つ流すこともない彼女の無情さは、たちまち国内に広がってゆく。また、王位継承問題では、大司教にその陰謀を暴かれて、反感を買い、教会を敵にまわす結果になってしまう。こうして彼女は我が子可愛さに、野心家となり、陰謀家となり、その上殺人まで犯して権力を志向したが、結局は国民と教会を敵にまわすことになった。そしてこれが原因で、彼女は凋落の運命を

迎るのであり、彼女の命までも奪ってしまうのである。彼女のこのような行為は王妃という高位にあったことから、その影響は国中に及ぶものであり、中産階級の Starbrow が Fan に及ぼす影響の比どころではない。Starbrow の Fan に対する嫉妬心や邪心は個人対個人の域にとどまるのに対し、Elfrida の場合は国内を二分するほどの影響力を持つ。絶大な権力を持つ者は、その反動もまた大きいと言える。Starbrow ならば自分の非を悟った時、相手に謝罪することで許されもするであろうが、王妃ともなればそうはいかない。しかも先夫及び義理の子 Edward 王子殺害に手を貸した彼女は城の内外から批難をあび、大司教を敵にまわしたことで世間の信用を全く失う結果になってしまう。しかし、最も彼女を苦しめたのは良心の呵責である。彼女は愛していた Edward 王子を殺害した事件を忘れられず、煩悶するからである。王子が血に染まり、馬に引きずられて、沼に消えた姿が目に見え、恐怖にかられるからである。世間の批難は城内に閉じ籠り、これを躲すこともできようが、心の病は消すこともできず、彼女の苦悩が続く。次の場面は刺殺された Edward 王子に奇跡がおこり、住民が騒いだために、教会側ではその遺骸を別の修道院に移送することにしたのであるが、その行列に参列する王妃の哀れな姿を描いたものである。

Once more she would appear before the world, not as the beautiful, magnificent Elfrida, the proud and powerful woman of other days, but as a humble penitent doing her bitter penance in public, one of a thousand or ten thousand humble pilgrims, clad in mean garments, riding only when overcome with fatigue, and at the last stage of that long twenty-five-mile journey casting off her shoes to climb the steep stony road on naked, bleeding feet.<sup>14</sup>

何という変わりようであろうか。ここには往時の威厳はもはやなく、粗末な衣服を纏い、罪を悔いる悲惨な姿があるのみである。このような次第で、この作品の後半は王妃の良心の呵責をとりあげ、権力の座に着いた者が迎える数奇な運命を描いている。Starbrow の場合にはその配慮のなさ、嫉妬心から、Fan を苦しめることはあっても、自ら良心の呵責に耐えねばならないような場面は見られない。あるいは気位の高さや、誤解のために、恋人の Captain Horton を苦しめることはあっても、最後には仲直りする仕組になっている。しかし、王妃は野心を抱き、権力を徹底的に追求していった結果、自らも

破滅する運命になった。自分の苦悩を救うのは神との和解しかないことに気付いた時、彼女はそれまでの罪を懺悔するのであるが、結局は時すでに遅く、最後は死体となって川のなかで発見され、この小説は終わっている。

上記三書を通じて言えることは、これまでの女性像とはかなり異質な、もう一つの女性像が見られるということである。それは舞台設定や三人の社会的立場を考えれば、容易に想像がつく筈である。Rima に代表される多くの女性は大自らのなかで、これを崇拜し、これを謳歌する生活を送った。一方、Elfrida に代表される女性は社会環境の相違上、実社会に住み、人間界の空気を呼吸しながら人生を送っている。そこに起こる事件も、時には血生臭い、世俗的な人間模様を反映することになるのである。

#### 4. 虚像と実像 一結語一

作者はその長い生涯において小説よりもエッセイを数多く書いているが、処女作の場合は小説であった。この処女作 *The Purple Land* (1885) は以後の作品の、それが小説であれあるいはエッセイであれ、多くの原型を含んでいる点で大きな意義を持つのである。例えば、この作品を繙けば、これまで述べてきた作者の女性観は言うまでもなく、自然観や文明観、あるいは教育や思想など、広範にわたる彼の基本的な創作態度が表明されていることがわかる。女性観に限定して言えば、これまで見てきた通り、作者には相異なる二つの女性像があり、その両者はいずれも処女作にその原型が芽生えていたのである。そして、この処女作における二つの女性像を合わせ考えてみると、Margarita や Transita に代表される作者の理想とする女性の方に力点が置かれ、Dolores に見られる現実的な女性よりも優位な位置を占めている。このことは小説構想と密接に関連しているのであり、作者はこのなかで都市や機械を中心とする文明を批判し、田園生活を謳歌しているからである。従って、そこに住む女性は当然その生活や風土に順応した、自然を愛するに相応しい女性でなければならないであろう。その代表者が Margarita であり、Transita であった。登場する女性たちといい、自然に帰れという小説構想といい、処女作は作者の理想を反映した異国情緒豊かな作品になっている。以後の作品は、特に小説における女性観について言えば、これら相異なる二つの女性像を継承し、発展させていったものと考えられる。

第二作の *A Crystal Age* (1887) は作者の思想を表明したユートピア小説であり、理想国とそこに住む理想人を夢に託して描いたものである。この点、構想そのもの

が処女作を継承し、発展させたと考えて良いであろう。この作品はその当時のロンドンの社会や風俗・習慣、あるいはそこに住む人々の趣味や思考などを揶揄した、痛烈な諷刺小説となっている。また、そこに登場する妙齡の、と言っても長寿国の娘であるため、31歳である女主人公 Yoletta について言えば、美しい女性であり、不可思議な性状を有し、美しい声の持主であるなど、未来の Rima の出現を予想させる点が数多く認められる。ユートピアを描いたという作品自体の性格からして、彼女のような現実離れした女性が実際にこの世に存在するの否かは別問題として、作者が理想的な想像上の女性を描いたという点は否定できないであろう。この意味から Yoletta は処女作の二人の女性と同一線上に並んでおり、その延長上にある Rima に至るまでの中継点の役割を果たしていると言える。

第二作に遅れること5年後の、1892年に発表された *Fan* という小説になると、作者は自然を背景とし、理想や夢を描いた従来の定型を破り、ロンドンの実社会を、あるいは人物を如実に描写した点で好対照を見せている。第二作の場合は、荒涼たる大草原に存在する一軒の大邸宅を背景に、そこで理想的な生活を営む大家族を描いたものであり、処女作にみられる田園・牧歌的な生活を一層理想化した作品であった。また、第二作は処女作同様、理想を自然に求め、近代化に伴って起きる人間の疎外問題や、機械化され、自然破壊が押し寄せる大都市に対する嫌悪を述べたものであった。このことは次の一例、即ち “Why, a city, I take it, is nothing more than a collection or congeries of houses—hundreds and hundreds, or hundreds of thousands of houses, all built close together, where one can live very comfortably for years without seeing a blade of glass.”<sup>15</sup> と述べ、ロンドンという大都会を一本一草もない人家の密集地として、これを痛烈に諷刺したことからも想像されるであろう。ところが *Fan* に至ると、作者はこれまでの理想郷追求から一転して、今度は現実を擬視し始める。皮肉なことに、嫌悪したロンドンの実社会に視点を移動させ、そこに住む下層階級の人々に取材し、ありのままの姿を客観的に描いたのである。当面の女性像追求という論点から、登場する女性たちに限定して言うならば、主人公の Fan と彼女の恩人である Starbrow の二人を論外にすることは不可能であろう。Haymaker も言うように<sup>16</sup>、この小説の主な焦点はこの二人の関係に当たっているのであり、主要な登場人物でもあるからである。まず、Fan の方から述べるならば、その性状において、従来の理想像から完全に遊離し、独立したとは言えない点もあるが、空想的なあるいは

は想像上の人間ではないという点で注目される。実社会の人間にしてはあまりにも清浄無垢なところが見られ、ロンドンの生活以上に田舎に興味を示すところなどは作者の理想を反映したものと考えられるが、大都会で幾多の辛酸をなめながら必死で生きようとする姿は、これまで見ることでできないものであった。一方、彼女を保護し、教育の面倒をみてくれた Starbrow の場合は、*lady* としての身分やそれに伴う財産があり、安定した日常生活を営んでいる点、処女作の Dolores に類似している。男性社会を知らなすぎるこれまでの女性たちと違い、二人の場合は自宅を社交場としてこれを解放し、男性と対等の立場で生活を楽しむのである。Starbrow のごときは男性の気に入くわぬ言動に対して、これを一喝するほど気丈夫なところがあり、二度とこれを許さぬ厳しさがある。例えば、Captain Horton が Fan に淫猥な行為を計画したのを知った時、彼女は彼と絶交し、最後までこれを許さぬ強い態度を示すのである。彼女の性格を分析してみると、このように気丈夫で威厳にみちたところがあると同時に、また涙もろい面を持っており、複雑多感であることがわかる。自分では女性嫌いであると言いながら、身寄りのない Fan を保護し、愛し続ける矛盾をおかしたり、Fan が他の女性に好意を示すと嫉妬に燃え、烈火の如く怒り、急に冷淡な態度をとるなど、風変わりな面を持つ。もっとも、処女作の Dolores の場合も、主人公の Lamb の愛を得られないと悟った時、彼に激しく抗議し、罵倒するほど激しい気性を示すが、結局は彼と和解し、許している。しかし、Starbrow の性格は彼女以上に強烈であり、彼女以上に多感な要素を有している。特に、思いを寄せた Horton の浮気を知ると、彼女はこれを許すことができず、冷酷な態度で彼をあしらひ、復讐し続けるのである。このような彼女の愛する者への嫉妬心や復讐心には、丁度 Elfrida が愛する Edward 王子を殺害する行為の原型が含まれているように思える。Starbrow の場合は事件に直面した時、それまでの態度を一変して激怒したり、冷淡になったりするけれども、それ自体悪意のあるものではない。彼女がそうせざるを得ない原因が、多くの場合、相手側にあるからである。この点、陰謀をめぐらし、将来を予想した計画的な犯行を企てる Elfrida の陰湿な性格と異なる。いづれにせよ、彼女の気まぐれな性格、突如として爆発する激情、男性を侍らせる威厳と力強さなどに、Elfrida に相通じるものを感じる。

作者がこれ以後の作品においても現実主義を貫いてゆくのかと思うと、そうではなかった。1904年発表の *Green Mansions* に至ると、その期待を裏切るかのように、処女作や第二作にみられる以上に、彼の理想主義や想像力

を最高度に発揮した作品を発表するからである。女主人公の Rima にみられる諸特質は作者がかくありたいと希求する女性像の極致を示している。作者のその理想像は、ある批評家が“Rima is a wish”<sup>17</sup> と叫んだように、我々人間の願望であるとも言えよう。彼女の特質を調べてみるならば、処女作の Margarita や Transita の、あるいは第二作の Yoletta のそれを踏襲し、更には他の作家の影響を受けて、作者独自の女性像を完成していることがわかる。人間と自然は同胞であり、一体であるという思想、あるいは自然こそが神の創造したもう最高の美であるという芸術観に立脚して生まれたのが Rima なのである。作者が主人公の Abel に言わせて、“All the separate and fragmentary beauty and melody and graceful motion found scattered throughout nature were concentrated and harmoniously combined in her.”<sup>18</sup> と述べているように、彼女はあらゆる自然美の断片を集約し、結晶した自然界の寵児として描かれている。そこには俗界から遠くかけ離れた汚れなき女性、あるいは天使のごとき神聖な女性の姿がみられ、作者の自然に対する繊細な感受性と豊かな想像力の賜物である虚像が、みごとに完成している。Rima に至って、処女作以来追求してきた作者の理想像が始めて完結したと考えてよいであろう。

ところが1920年発表の晩年作、*Dead Man's Plack* に至ると、再度現実的な女性が現われるのである。そこに登場する Elfrida の姿には、前述の通り、Rima の性格にみられる純粹さも神聖さもない。そこにみられるのは権力を志向し、復讐に燃え、夫でさえも平気で裏切るという、驚くべき残忍性や俗悪性である。とかく性格描写の曖昧さを批難される作者が、晩年に至ってこれほどリアルに人物を描写したことに驚かされる。このような現実性、あるいは実態性を伴った人物描写は、既に見てきたように、処女作にその萌芽が覗かれていたのであり、*Fan* に登場する Starbrow において大きな成長を遂げ、Elfrida に至って完成したと言える。従って、Rima 像の場合も同様のことが言えるのであるが、Elfrida 像は突如出現したのではないのである。それが完成するまでには幾つかの段階を経ているのであり、長年の歳月を費やしているのである。

## Notes

- 1 W. H. Hudson, *The Purple Land in The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1920), p.199.
- 2 John R. Payne, *W. H. Hudson: A Bibliography* (Kent: Dawson • Archon Books, 1977), p.38.
- 3 Edward Garnett, ed., *153 Letter from W. H. Hudson* (London: The Nonesuch Press, 1923), p.182.
- 4 Morley Roberts, *W. H. Hudson: A Portrait* (London: Eveleigh Nash & Grayson, 1924), p.140.
- 5 John T. Frederick, *William Henry Hudson* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1972), p.45.
- 6 Richard E. Haymaker, *From Pampas to Hedgerows and Downs* (New York: Bookman Associates, 1954), p.329.
- 7 W. H. Hudson, *Fan: The Story of A Young Girl's Life in The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p.44.
- 8 *Ibid.*, p.52.
- 9 *Ibid.*, p.81.
- 10 *Ibid.*, p.89.
- 11 W. H. Hudson, *Dead Man's Plack An Old Thorn & Miscellanea in The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p.18.
- 12 *Ibid.*, p.33.
- 13 *Ibid.*, pp.41-2.
- 14 *Ibid.*, p.64.
- 15 W. H. Hudson, *A Crystal Age in The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1922), p.21.
- 16 Haymaker, *From Pampas to Hedgerows and Downs*, p.329.
- 17 Carlos Baker, Introduction to *Green Mansions* (New York: Alfred A. Knopf, Inc., 1963), p.xi.
- 18 W. H. Hudson, *Green Mansions in The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p.132.